

座長 鈴木 鍾 美

演題4 当科における上顎洞炎の種々相について

○谷 藤 全 功, 柘 植 信 夫, 伊 藤 信 明
大 屋 高 徳, 工 藤 啓 吾, 藤 岡 幸 雄

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

上顎洞炎は一般に耳鼻科で治療されている。しかし解剖学的に口腔と隣接する部位であるため、歯科治療、とくに抜歯後感染、歯根嚢胞からの感染、あるいは根管治療などによる歯性上顎洞炎のみならず、時には非歯性上顎洞炎の患者も口腔外科を受診することがある。我々は最近3年間に、このようにして入院した7例の歯性上顎洞炎および3例の非歯性上顎洞炎を治療したので、その成因や臨床症状などについて検討を加えてみた。

これら10症例の主訴は、鼻閉感が4例で最も多く、次いで頭重感と頬部腫脹が各々2例で、さらに後鼻漏と咬合痛が各々1例に認められ、むしろ歯科的症状よりも鼻症状がより多く観察された。しかしながら原因別では根管治療、抜歯後感染および歯根嚢胞からの感染が各々2例、次いで感染根管および上下顎骨々折によるものが各々1例ずつとなっていて、歯科口腔外科的処置に関連して発症したものがより多く、鼻茸や原因不明などの耳鼻科的原因によるものは、各々1例のみと少なくなっていた。治療は、歯性上顎洞炎7例中2例は、原因歯の処置と消炎療法の併用で治癒したが、他の5例は症状が軽減しなかったため根治術がなされた。また非歯性上顎洞炎の3例は根治術を行ったが、その場合でも上顎洞と歯牙との関連性を精査し、1例では術中に上顎洞内に根尖の露出が予想されたので、術前に抜髄、根管充填などの歯牙処置を併せ行った。以上我々は上顎洞炎の治療に際しては、近接する歯牙ならびにその処置が、とくに重要であるので、これらの関連性について検討を加え報告した。

質 問：野 坂 久 美 子 (小児歯科)

小児歯科では急性の上顎洞炎が多いのですが、症状が軽減した後に、根治手術を必要とするかしないかの判定についてお教え下さい。

質 問：逢 坂 義 計 (耳鼻咽喉科開業医)

1) 歯性上顎洞炎の7症例は全て上顎洞にのみ炎症が限られていたか。

2) 7症例のすべてに根治手術を施行したというか、単に洗滌、薬液注入等は考えなかったか。

3) 術後の遠隔成績は必ず検討して欲しい。

回 答：演 者

1) 今回の症例においては、上顎に限局しており、篩骨洞に炎症が波及しているものは、ありませんでした。

2) 歯性上顎洞炎の7例中5例は根治術を行っており、他の2例においては、抗生物質の投与、及び抜歯窩からの薬液注入を行いました。

3) 今回の報告は、原因及び臨床症状について検討したもので、予後に関しては、次の機会に報告したいと思います。

追 加：工 藤 啓 吾 (第1口腔外科)

消炎療法を数カ月間実施し、十分効果のみられないものについてのみ根治手術を実施している。なお歯性のもものでは原因歯の処置も併せ行っている。

また、非歯性のもものでは、できるだけ上顎洞に限局しているものについて手術を実施するようにしている。

演題5 N-butyl-N-nitrosourea 投与による実験的腫瘍発生について

○野 田 三 重 子, 竹 下 信 義, 畠 山 節 子
佐 藤 方 信, 鈴 木 鍾 美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

N-butyl-N-nitrosourea (NBU) はラットに経口投与すると高率に白血病、乳癌、軟部組織腫瘍を発生させる芳香族アミンである。1975年のGANNに発表された福西らの報告によれば幼若な Long-Evans 系ラットにNBU, 300mg/kgを2週間隔で4回、計1200mg/kgを経口投与した時68匹中4匹にameloblastic odontoma等の歯性腫瘍が発生している。我々は福西らと同じ方法でその追試を試み発生した腫瘍について、発生までの期間、発生部位、組織像、転移などについて述べ考察を加えた。

実験群82匹中17匹に結節性の腫瘍が発生し、発生率は20.7%、雌雄は雌8匹、雄9匹であった。腫瘍発生までの期間は投与後100日以上で、投与後の飼育期間は投与中死亡したものをのぞくと最短40日から最長430日で平均258日であった。ほとんどのラットは腫瘍死するまで観察した。発生部位は線維組織、血管、筋

などの軟部組織が多く13例, その他乳腺に3例, 肝臓が1例であった。腫瘍の大きさは小指頭大から鷲卵大のものまでみられた。

組織学的には軟部組織に Fibroma 2例, Fibrosarcoma 4例, Rhabdomyosarcoma 4例, Hemangioma 3例, 雌の乳腺に Adenocarcinoma 3例, 肝に Hepatoma 1例がみられた。また腫瘍が多発している例が2例認められ, 1例は Fibrosarcoma で他は良性の腫瘍で Fibroma と Fibroadenoma の例であった。17例の腫瘍のうち Adenocarcinoma 3例と Fibroma 2例にヘマトキシリンに濃染する巨大な細胞が著明に出現していて, 細胞質は顆粒状で脱顆粒がみられた。この細胞はトリジンブルー染色でメタクロマジーを起し, ウォーターブルー, オルセイン染色で赤く染色され mast cell と同定された。

今回は末梢血による白血病の検索を行っていないが肝・脾臓などの各臓器の検索, 腫瘍における mast cell の動態又顎骨の反応などについては今後検索する予定である。

質 問: 大屋 高德 (第一口腔外科)

1) NBUによる顎骨部に腫瘍を発現した症例はありましたか。

2) NBU投与中止後も, 腫瘍は発育したか。

質 問: 伊藤 忠信 (歯科薬理)

乳腺由来のものと考えられた理由。

回 答: 演 者

1. (大屋先生に) 福西らの報告ではNBUでラットの顎骨内に少数ながらも歯性腫瘍が認められるという報告があります。
2. (伊藤先生に) 文献的にも雌に乳癌ができるという報告がある。又 Adenocarcinoma が腹部の皮下に発生している事, 乳腺の他に組織由来が考えられない(ラットの皮膚手足の裏以外には汗腺がないので)ので乳腺由来のものと考えてよいと思う。

回 答: 佐藤 方信 (口腔病理)

1. 腹部皮下にみられた腫瘍は肉眼的, 組織学所見から乳腺由来の腫瘍と考える。
2. 臨床的に人乳癌においては腺癌のみならず種々の組織像のものがみられる。

演題6 上顎癌に対する三者併用療法の検討 特に再発処置について

○大屋 高德, 石橋 薫, 山口 一成
千葉 清, 近江 啓一, 工藤 啓吾

藤岡 幸雄, 村井 竹雄*, 鈴木 鍾美**

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座*

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座**

昭和51年から53年までの過去3年間における当科の上顎癌症例は15例であった。これら全例に照射(60Co 800~3400R)と制癌剤(5-FU.625~3,700mg)の量を極力減少させ, その1~3日後に徹底的な局所清掃を実施したところ, 良好な一次治療成績が得られているのみでなく, 顎顔面の形態と機能をも保存し得る症例が多くなっている。しかし, 15例中7例(46.6%)に再発がみられたので, 再度局所清掃を主体とした再発処置を実施し, 以後いずれも良好に経過している。

即ち, 一次症例は上顎洞癌(T₃)が11例, 歯肉癌が(T₄)3例で, また二次症例は歯肉癌が1例であった。15例の組織型は扁平上皮癌が12例, 腺癌が2例, 円柱上皮癌が1例であった。つぎに7例の再発までの期間は術後3カ月目が3例, 4カ月目, 5カ月目, 6カ月目および3年目が各1例であった。

再発7例の治療内訳は, 3例の扁平上皮癌にはBleomycin 1回5mgを計30mg~50mgの静注と, 60Co 1回200Rを1,200~1,400Rの同時併用後に局所清掃を行ったが, 1例の円柱上皮癌では1,200Rの照射後に局所清掃を行った。また3例には外来で経過観察中に生検をかねた局所清掃のみを行った。なお, 1例には再々局所清掃を行った。以後6カ月以上を経過しているが, いずれも局所の腫瘍は制御され良好である。

座長 上野 和之

演題7 生活歯根の骨内埋伏法を用いたオーバーデンチャー

義歯装着後における支台歯の病理学的考察

○塩月 牧子, 小林 琢三, 清野 和夫
山田 芳夫, 高橋 孝一, 田中 久敏
鈴木 鍾美*, 竹下 信義*, 大屋 高德**

岩手医科大学歯学部補綴学第一・第二講座

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座**